

# 下商物語 (その一五)

## 人にすがらず自ら務める

寄稿 富田 義弘氏

めでたく下商を卒業なさる皆さんに心からのお慶びを申し上げ新しい船出の航海安全と、如何なる荒波にも対処しうる覚悟を今からお持ちの程、お祈り致します。そして、二年生、一年生諸君は、卒業生につづく培うべき下商精神を胸に秘めてお読み頂きたく存じます。

昨今、新聞やテレビなどが就職の狭き門、雇用率の悪化を大々的に報じていますが、これは最近の徴候として世の中すべて過保護に傾きすぎているのではないかと私は思う次第です。

さて、これから書くことは、決して私たち同期生を代弁する自慢

ではありません。皆さんに何かの示唆ともなればと思い遠い日々のことどもを書き記すだけです。

第二次世界大戦で日本が敗れて僅か七年半の昭和二十八年三月、私は下商を卒業しました。衣食住はまだまだ困窮の時代で就職も選ぶという段階ではなく、どこでもいい、とにかく雇ってくれさえすれば、といった切羽詰まった状態でした。

当時、下商の就職担当教諭は中川力先生で、毎日のように市内はもとより県内、県外の企業を訪ね回り、就職希望の生徒に求人情報とその内容を伝えて適材適所を検討し、本人の意見にじっくり耳を

傾けてくださったものです。

また、下商に初めて併設された進学コース「清組」の立川建章先生も、当時としてはまだ数少ない進学希望一人一人に接して、学問に対する思いのたけを語らせて上で、受験すべき進路を決めさせたものでした。

それらによって、正確ではありませんが、私のメモする所では、就職組が、山口銀行、下関信用金庫、下関市役所などに各数人、東京銀行、住友銀行、三井銀行、西日本相互銀行、大和証券、日興証券、松下電器、出光興産、神戸製鋼、小野田セメント、日本漁網、三菱造船、林兼造船、三井東洋、シチズンなどに複数入社しています。

また、野球部の選手は自ら率先して新日本製鉄や協和発酵などのノンプロに進み、特筆すべきは軟式野球部からプロ野球の西鉄ライオンズに入団して話題になった猛者も居るのです。

また、職業高校から大学への進学が極めて少ない時代ながら、国立は山大が五人、長崎大が二人、滋賀大が一人、北九大が三人、私学では早稲田、中央、明治、専修や東京経済などに複数入学、関西でも同志社、立命館、大阪商大などにも合格しています。

彼らの中には、公認会計士千百人を抱える監査法人の代表社員を勤めた者や、松下住宅社長、TO常務、ピクスター音楽産業取締役、プリジストンスポーツ社長、税理士、司法書士、コンサルタントとして活躍したのも居ます。

これらのことによっても思いつくのは、「困難な時代に青春を送る君たちは、この苦痛を時代や政治のせいとは決して思わず、これこそ乗り越えるべき人生のハードルとして対峙して欲しい」と言われた先生たちです。

だから、卒業を控えた生徒たちも、就職、進学担当教諭に少しでも負担をかけまいと、自分自身や

家庭を通じ、小さなきつかけを握り、懸命に進路を求めた結果だと私は思っています。

何事も、人にすがることばかり考えず、自ら求め、自ら努力すれば必ず何かの道は開けると思うのです。

\*今年度、四回にわたり富田氏(昭和28年卒)より当時の本校の緻密かつ貴重な記録を元にご寄稿いただきました。ありがとうございます。